

短編集

秋
桜「サンプル」

さんすう

死ぬことすらも叶わずに

司弓

橙色の夕陽が差し込む放課後の弓道場。今日は部活がないが故にいつも以上に静まり返り、それでいてどこか騒がしかった。そんな弓道場に影二つ。弓道場の床に寝そべった弓弦と、それに跨りひざ立ちする司。逆光のせいで弓弦からは司の表情が全く見えなかったが、夕陽を背に自身を見下ろす姿はこの世のものとは思えないほどに美しかった。

きつと表情が見えなかったからこそ美しく見えるのかもしれない、と弓弦は思った。そして、この究極の美を冥土の土産にできるなんてあまりにも贅沢だ、とも思った。

「結はれることがないのなら、いつそあなたの手で殺してくださいまし。」

そう言つて、弓弦は自身の細く白い首に司の両手をそつと添えさせた。

瞳を閉じるその様は、断罪を待つそれではなくどこか安らかで、まさに神から与えられた完璧な造形美を主張してくる顔は、ただひたすらに司による絞首を待つていた。そんな弓弦の様子を暫く見つめた後、司は懇願するように目を閉じた。そして弓弦の首にあてがわれた自身の両の手をそつと床についた。

それと同時に弓弦が目を開く。司の表情はまだ見えず、陽光だけが眩しく降り注ぐ。

「今日も、殺してはくたさらないのですね。残念です。」

弓弦は呟く。

そんな弓弦の頬に、数滴の液体。

川越ジャクリーン

ネオン！

薰アド

DJのスクラッチ音とともに、暗闇に明かりがともる。ちかちかと点滅する青、赤、緑。曲が流れれば、女の子たちは踊る。頭や腰や手足を自慢するみたいに。女の子たちは体を揺らす。音楽に溺れるみたいに。人の波はうるさいけれど、それもまた楽しい。このクラブに、俺を「アイドル高校の」だとか「羽風家の」だとかいう目で見える人はいない。それが一番楽しくてしょうがない。

「あーっ、薫くん！今日はこきまてるんだあ！」

女の子の声は高くて、体は細くて、柔かい。

「そうそう。そっちの子は？友達？へえ、かわいいね。今度デートしない？」

キヤハハと笑って、女の子たちはそのみずみずしい肌を揺らした。薫くんってそればかり！その通りだ。だってそうすれば君たちも喜ぶし俺もうれしい。ね、みんな笑顔でハッピーって感じ。

女の子たちのグループを行ったり来たり。ここぞとばかりに自慢のダンスを披露する、むさくるしい男には興味ない。ジャラジャラゴルドだのシルバーだのつけて、挙句の果てにパンツ見せてるんだから世もまだよね、げろげろ。スタッフのかわいい女の子からサービスでもらったカクテルを一口。ジュースみたいな甘い酒。なんとなくいい気分になってきた俺はダンスフロアへひよいと顔を出す。いつもは俺が出ていくと女の子たちはひそひそ品定め。そしてステップを見て寄ってくる。かわいい女の子ならときどきアイドルらしからぬ